



NEDOの研究評価制度

2026年10月1日

国立研究開発法人 新エネルギー・産業技術総合開発機構

事業統括部

目次



1. NEDOとは
2. プロジェクトマネジメントの進化に向けて
3. プロジェクト実施の流れ
4. 評価の実施時期と位置づけ
5. 評価の種類と対象
6. 評価項目・評価基準
7. 評価の実施体制
8. 評価業務の流れ
9. 主な委員会と実施内容
10. 追跡調査・評価
11. NEDOにおける「評価」を進化

NEDOとは

国立研究開発法人 新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)は、**エネルギー・地球環境問題の解決**や日本の**産業技術力の強化**を目的とする政府の機関です。

イノベーションに挑む企業や研究機関を**委託事業や補助金**などにより支援し、**事業化・社会実装まで伴走支援**する「**イノベーション・アクセラレーター**」を目指します。

事業数



74事業

(2026年4月時点)

展開国数



15ヶ国

(2026年4月時点)

執行額



1兆8069億円

(2025年度実績)

予算

(基金を除く)



5,052億円

(2026年4月時点)

プロジェクトマネジメントの進化に向けて

より高い付加価値を提供していくための指針として「**NEDOによるプロジェクトマネジメントの進化に向けて**」を2026年2月に公表しました。

プロジェクトの企画・立案

技術や業種を横断した支援体制の構築
委託費・補助金・懸賞金の適切な使い分け
DARPA／ARPA-E型の段階的案件形成の導入

プロジェクト実施中の支援

プロセス・コンサルテーションの導入
グローバル市場を見据えた支援体制

プロジェクト後の事業化支援

設備投資・資金調達・規制対応等の支援
民間投資・公共機関等との連携



NEDO による
プロジェクトマネジメントの進化に向けて

2026 年 2 月

国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構

1



プロジェクト実施の流れ

開始前	1－2年目	3－6年目	7－10年目
戦略策定	企画立案	開発・実証実施	フォローアップ
内外の潜在需要や技術開発の動向を収集。 次の有望分野は何か、どのような技術開発が有効か、技術戦略を策定。	有識者ヒアリングも踏まえ開発目標を設定。 5～10年先を見据えプロジェクトを企画・立案、具体的案件を公募・採択。	技術開発・実証実験の速やかな遂行を支援。 ステージゲート審査や中間評価を踏まえ見直し。事業化に向けた助言。	終了後の第三者による外部評価の実施。 事業化・社会実装の追跡調査と支援。経済的・社会的インパクトの測定。

評価の実施時期と位置づけ



評価の種類と対象

- NEDOでは、事業の規模、目的、内容および性格に応じて、評価を行っています。
- 評価は、プロジェクト評価、制度評価、事業評価に大別されます。
- 評価の重複を避けるため、NEDO以外で評価を行う事業については、NEDOでは評価を実施していません。

NEDOによる評価

プロジェクト評価

NEDOが実施者を選定して実施する研究開発に関して行う評価。

制度評価

NEDOが実施者及び研究開発内容を選定して実施する研究開発に関して行う評価。

事業評価

プロジェクト評価及び制度評価の対象となるものを除く事業に関して行う評価。

NEDO以外による評価

他府省事業、GI基金等

「国の研究開発評価に関する大綱的指針」の趣旨を踏まえて実施

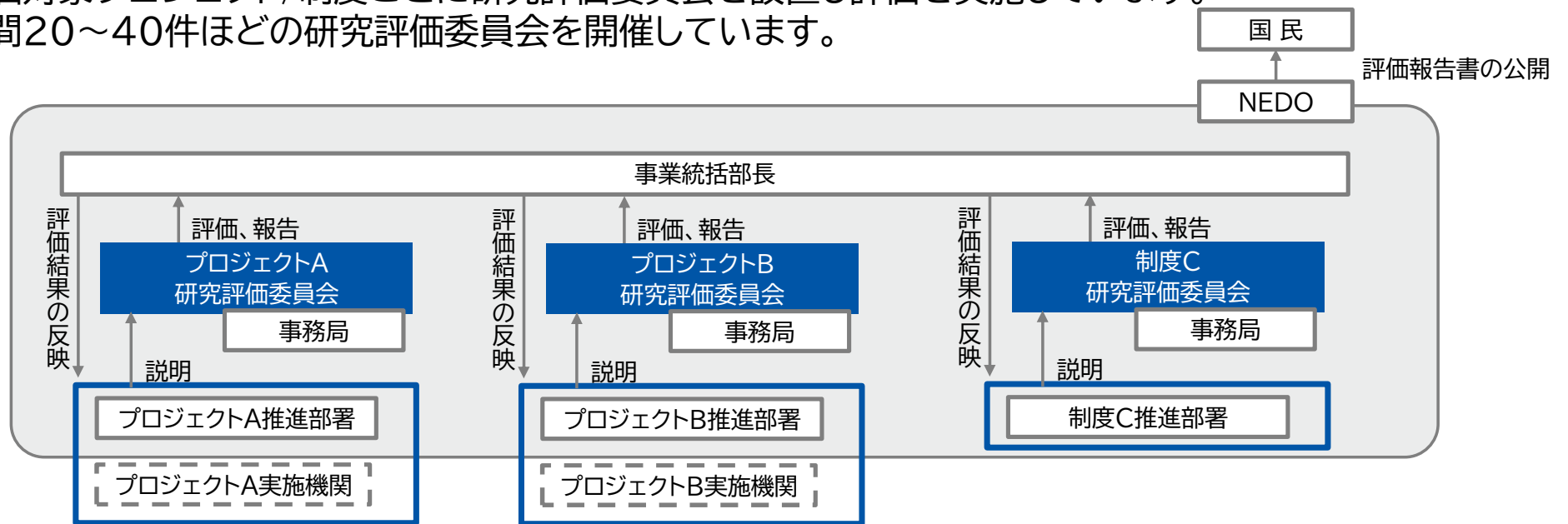
評価項目・評価基準

- プロジェクト評価及び制度評価については、経済産業省研究開発評価指針に基づく標準的評価項目・評価基準を準用しています。（表からは省略していますが、更に細かい評価基準が設けられています。）

評価方法	プロジェクト評価 及び 制度評価		
評価時期	事前	中間	終了時
評価項目・基準	1. 意義・アウトカム（社会実装）達成までの道筋		
	(1)本事業の位置づけ・意義 (2)アウトカム達成までの道筋 (3)知的財産・標準化戦略	(1)本事業の位置づけ・意義 (2)アウトカム達成までの道筋 (3)知的財産・標準化戦略	(1)アウトカム達成までの道筋 (2)知的財産・標準化戦略
	2. 目標	2. 目標及び達成状況	
	(1)アウトカム目標 (2)アウトプット目標	(1)アウトカム目標及び達成見込み (2)アウトプット目標及び達成状況	(1)アウトカム目標及び達成見込み (2)アウトプット目標及び達成状況
	3. マネジメント		
	(1)実施体制 (2)受益者負担の考え方 (3)研究開発計画	(1)実施体制 (2)受益者負担の考え方 (3)研究開発計画	(1)実施体制 (2)研究開発計画

評価の実施体制

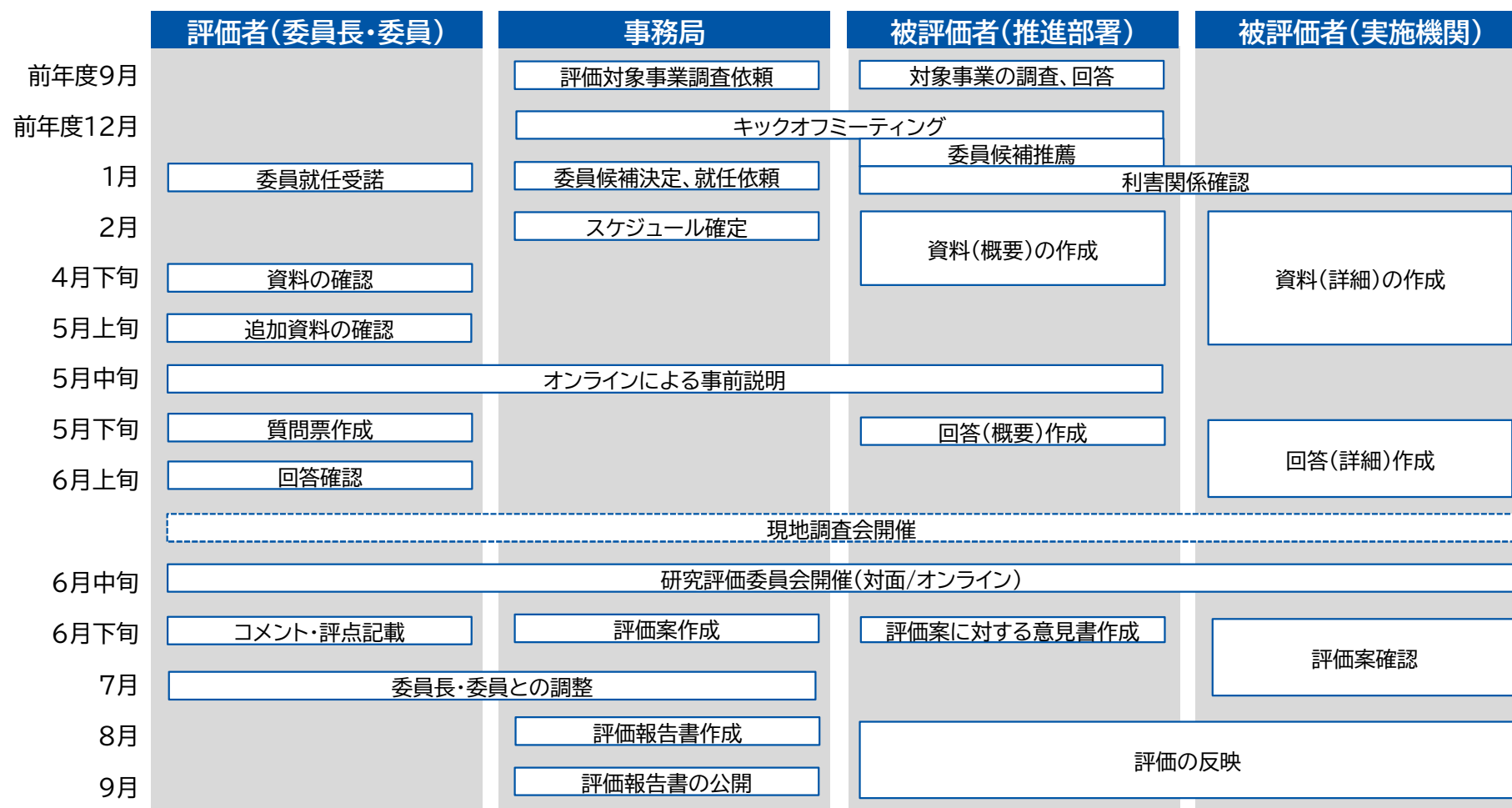
- 評価対象プロジェクト/制度ごとに研究評価委員会を設置し評価を実施しています。
- 年間20～40件ほどの研究評価委員会を開催しています。



各研究評価委員会の関係者

評価者	NEDO外部の専門家、有識者	3～7名(研究評価委員会毎に異なる委員)
被評価者	NEDOプロジェクト/制度の推進部署	3～10名程
	実施機関(プロジェクト評価のみ)	機関数 2～数10 × 各機関 2～10名程
事務局	NEDO 事業統括部 研究評価課	10名程

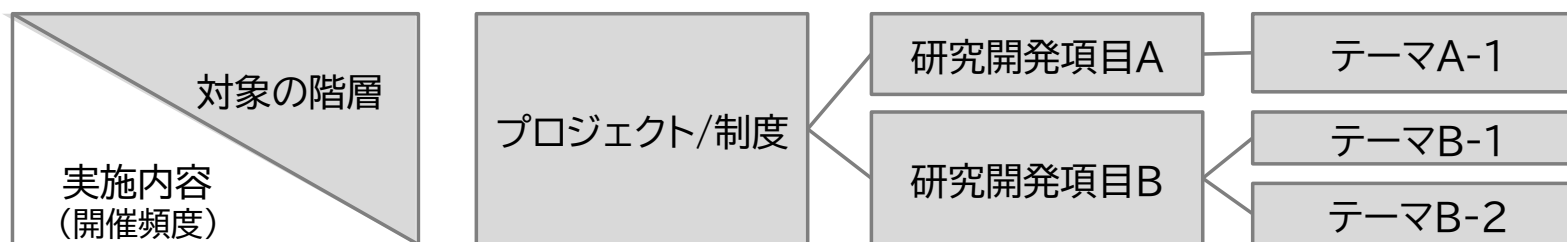
評価業務の流れ



(中間評価の場合の流れ)

主な委員会と実施内容

- 採択審査委員会は、採択可否を審査します。
- 技術委員会は、モニタリングと助言を実施します。
- ステージゲート審査委員会は、継続・非継続を審査します。
- 研究評価委員会は、プロジェクト・制度の全体を評価します。



評価制度とは別の
マネジメントの一環

採択可否を審査
(公募毎に実施)

採択審査委員会 *2

モニタリング・助言
(年1~4回)

技術委員会 *1*2

継続・非継続等を審査
(1~3年に1回)

ステージゲート審査委員会 *1*2

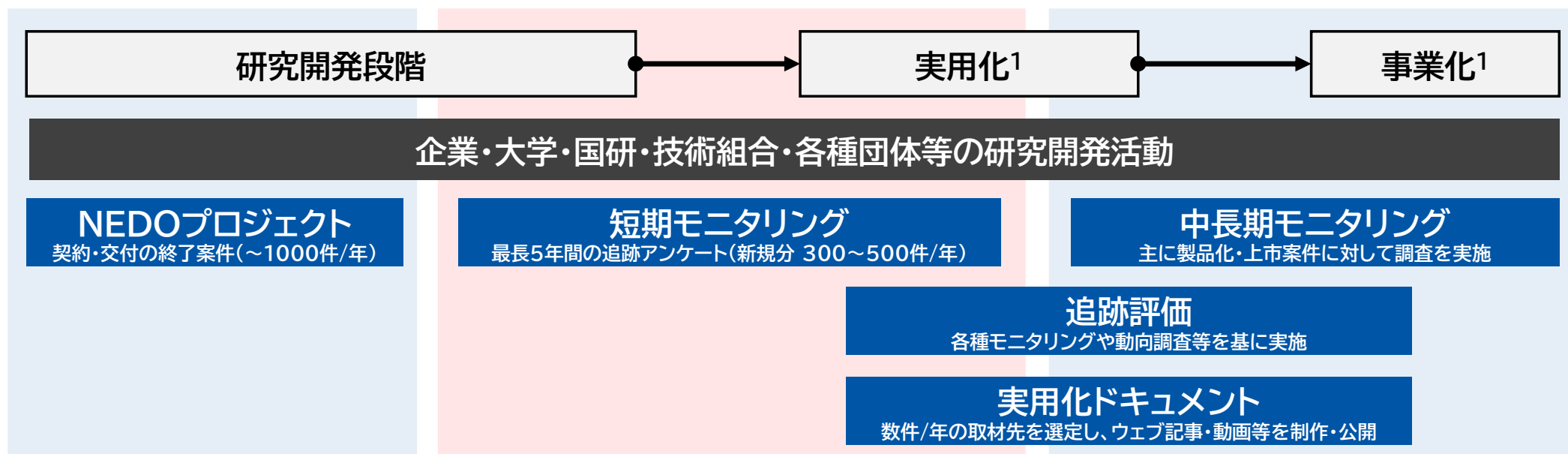
評価
(2~3年に1回)

研究評価委員会

*1 設置有無はプロジェクトにより異なる
*2 設置粒度はプロジェクトにより異なる

追跡調査・評価

- 追跡調査・評価業務として、短期モニタリング、中長期モニタリング、実用化した成果の広報発信（“実用化ドキュメント”）の活動を中心に実施しています。
- 「短期モニタリング」では、活動状況と開発成果の把握及びNEDOのマネジメント・制度設計に対するフィードバックを目的に、「追跡アンケート」にご協力をいただいています。



¹ここでの「実用化・事業化」とは、当該研究開発に係る試作品、サービス等の社会的利用（顧客への提供等）が開始されること、又は当該研究開発に係る商品、製品、サービス等の販売や利用により、企業活動（売り上げ等）に貢献することを指します。

NEDOにおける「評価」を進化

「評価を誰が、何のために、どう使うか」まで解像度をあげて整理し、
NEDOによるプロジェクトマネジメントの進化に資する評価制度に見直し中

現状の評価制度の課題

- 実用化に向けた将来の方向性やアクションの妥当性を議論する場へと移行しつつあるものの、
- 評価時期・結果が、現場の日々の判断や資源配分につながりにくい
 - 評価委員への説明に係る負担が大きく、他の委員会・確認プロセスとの重複感がある
 - 評価項目が実態に合わず、改善や組織的学習に結び付きにくい
 - 「良い評価を得る」ための説明に注力しがちで、そのため、不確実性、失敗、阻害要因等が表に出にくくなりプロジェクトマネジメントを向上するための機能が十分に発揮できていない
 - 評価に係る労力に対して得られる効果が低く、評価への納得感が得られない



進化した評価制度のイメージ

- 適時に意思決定を支え、改善を促す評価
適時にNEDO担当者やプロジェクト実施者に判断材料や助言を提供
- マネジメントと一体となる主体的な評価
他の委員会や確認プロセスとの融合等、効率的で主体的な評価を促す
- データ整理の一端を担う評価
評価者やNEDO担当者やプロジェクト実施者が必要なデータを効率的に収集し効果的に活用できるシステムを提供
- 学習を促す評価
プロジェクト単体の経験を組織で蓄積するとともに、わかりやすく組織内外に展開



ニュースリリースや公募、イベント情報等、様々な最新情報を発信しています。
ぜひフォロー・ご登録をお願いします！



NEDO
(@nedo_info)



NEDO【英語版】
(@nedo_info_en)



NEDO



スタートアップクラブ



NEDO Channel



NEDO PR Channel

